# 青山御流 活花手引種 前篇 一

青山御家御流

桂月園泰雅先生著

# 活花手引種 前篇

京都 大谷津逮堂藏

# 自序

蓋聞天者缺酉子地者不滿卯午方圓險夷共屬乾坤萬物爲其氣被覆載而自象乎其形是以爲挿花之體也高低斜正則南北之極長短屈伸準陰陽之度量以爲左右前後輕重繁瘦之纒墨而紀本末早晩之等上翫于公宴加乎佳節慶賀之式下備于賓客之禮夫非情之於有情也守眞保壽與於菓

實花葉形狀將資浩然之氣養神慰意乃是花木
不言之妙榮枯盛衰移於四序之變化濃淡疎密
隨于山川風土坦然莫與物爭焉雖告諸人人獲
之未必樂焉耳目徒惛昧于名聞而心身亦奔走
于利途嗚呼人者三才之一而非靈物之長哉頓覺
此意則茅檐藪棲坐均于僊界無誓言而緣于神
明佛陀弗學而遊君子之藩籬矣原夫故
正二位大納言藤原基衡卿公務之暇尤留意於

此伎濫觴于青山流溢于海外嘗羽翼於規準
本諸三教配諸五典其條律全具矣譬授于人
得一枝則求性而示順逆之理作一瓶則繫乎邪
正得失來由以述善否之故擬禮讓教諭敬和之
道焉 余汲其末流奉首肯初設會莚於東都弘
其風於丘里爾來同好數百學習積久略達其
義者居多焉遂承 園公命不擇貴賤士婦
集所挿之花狀一百瓶而號活花圖大成往年

上梓布乎世雖然或其花様繁茂則意味不淺
而畏初學難辨明於是同社某專欲誘掖容
易頻來從史故再蒙 今園公旨撰其出據
隨大小講增減應屈伸分表裏加之就幼學
所挿之體直以模倣焉省有餘補不足所換入之
始末併圖之鋟棗備便焉苟將掬 青山之滴
輩勿論都鄙遠近乗家務餘力依此集圖學
之則林野之景色河洲之意態迎模於一卉一枝

貯于瓶裏粧于席上觸香對艶則雖暫時手技
其娯豈盡乎斯哉

東都桂月園吉尾泰雅謹撰

寛政十二庚申年
孟春穀旦

さくら折にふれ時につけてのこれなるをとりまき
ふしきなるひとつあはれおもむくおのつからおもはれならふ
手にふるゝ本等乃詠なるうつくしくて
よのつねならぬ櫻なる中よし野山乃花をたとへ
ともしらんてしむかしものゝまなかのさくら名
くらしきふ山乃櫻本居しら思ふれもみちしらて
ぬるゝあそむしとしあに花をたはふれしらくを
絵師桂園へうけまゐらせしき流の
まさとよ柘植のしるしおは絵けれなくなかま
よりてのふかきよりあるへしのそにはそのて
かしこまりかくしたる書

おそれまゐらせ候へとも御きけんよく〳〵うけたまはりまゐらせ候
いはせそのあまれとりかふしゆめなきことなかりしはつかしさ
思ひしらるゝ事ひとへにひをむかひやんことなき難波女れたちまする
はしめしよりおりしけふまいらせてこゝろみのすゝみ
もしなきむすめをひさこれのかしこさまのさまきくに
推しはかりてそのうけをさゝえ枝のかり
あさましくもくるしむくともおりしせんとて御なさけ
宝くぬ十二ていよりまゐらせ候みふものはことく
たのみ候

# 活花手引種凡例目録

## 巻の一

○立花箇條圖繪部分の事
○傳說大要箇条の事
○花瓶仕掛並瓶中善悪の事
○五種花挿同様方並花形の事

## 巻の二

○稽古花形並倭漢異名等の事

## 巻の三

○即興花形并花形畫の事

○床柱附書院の男饋繪待花形圖の事

卷の四

○同社花形競爭圖繪の事

卷の五

○總傳箇條若瑁目錄の事

○四季花園摺并進退取扱手當の事

○花道大意攝授問答并生活挿字義通俗の事

目錄畢

三枝四所秘當の事

○凡花形の一体に三の坐を立る載相の三枝を居下に三偶の体を立中央を家位とあらして大小曲直に損ひ疎密長短離合し三枝に形し五枝に備く七所にまてつけて出生の自性に則妙用変化とする事ハ奥の図に依て弁明すへし

花ハ供養の第一番頭の先なる事

○花道ハ妙法に不言にして縁路の備なく能く全を済ひ導き其心をひらかしむん罪ひて思ひ邪なる人ハ則菩提是なる附ハ天然草子祥を照し吉く五に寛を得神佛に捧けて供養の第一

賓客にまみえて答拝の最初より茶臺盆の上なる床の飾つらき
なせバ徒く枝葉の塵砂を拂ひ或ハ蜘蛛の糸枯葉落花
末を取捨水に灌ぎ露をもたせ器花清浄なるべし或ハ
席上にして客へ一瓶を覗き亦ハ傳へ花瓶る書様同意之

禮義を正して花入置き事

○花ハ神佛に備へ高位貴人にまいらする床の錺なれバ尤禮義を
正し入置き事なり譬へ獨樂放情の慰ミとなしても儀の
始に三枝の禮議あり筆ハ読ついて気府を含むる戯既にかくの
ごとし鬼神ハ常に直なる其影を現し玉ふ況や客来きたらん時花

ものいはざればとて必禮義を違へるべからず

花形正風躰を専とすべき事

○凡花ハ正風を常として出格奇巧なる体を好み或ハ異花奇品を求め又自己の未熟を悔くしび猥に人の花に批判を加へ或ハ他を譏し或ハ器物等の善悪に拘り名聞に誇り或ハ義理を缺て分限を越へ道具を飾るが如き者ハ皆花神の悪む所にして此座の仇鼻祖の甚しむべき者なり是等の趣ハ功者不功者貴賤貧富に拘らず慎べきもの也

稽古に前後の次第ある事

○花を習ふの次第ハ先穀活の名を覚へ次ニ瓶中に納ることの

工夫第一之貫執行ハ出生性ニ應して求むるの術也然して瓶中ニ
能居る時ハ其風情成易く出生に自らかなふと是初心ハみて
何程出生を求むとも瓶中諫断なる故意とてかなはず又枝葉を
撓るハ一旦ニ性を悩む枝なれバ術ニ至てハ長く出生を助くる
なり稽古の始めより強く出生のせんさくと枝葉花を惜しく
きて除く事を厭ふ時ハ自ら縮して其物を得ずして生涯花ニ
遠くなり是逆ニ撓て順を修るの傳なり

## 二種取合物の事

○二種三種取合するハ大抵木ニ草を取合となり或ハ草ニ草

本ニ末を添るもあり高ニ低き強きニ弱き濃きと淡き黄きに白と
色かはる名変る物を取合べし　但山木ニ草ニ実ニ実の類花
葉ともにあはれる物を交るハ急ぎて是者奥の図を考へて

花取満潔の事

○花取ハ甚だしけれむよりハ凋みたるもよし　枝葉満たるむよりハ
あげたる所ニ雅情有　花も葉も衰たりハあしく枯きたなきゆかし　花
風情有　惣じて花ハおしもなる所より二三所して　其一ツや
本なげ葉隠まつるゆるハ当相し　訳あり

茎形草之伴九変の事

○真ハ正しく直なる姿を云 行ハ斜ニ横たへて体を云 草ハ麁くく
見る枝を云ふ 右三体分れて九体となる所謂副あけ後つけ体とし
中たう表ヨリ裏ヨリ水際なひき前たつて後たつて等あり
但花形ハ高さも瓶三長ケに過べからず 以下低きを好ハ半は似たり

花瓶善悪の事

○器形ハ素朴にあしく数ふらく俗物らしく珍しきを好。又ハ唐物僞物
ともに世俗の好むる器ハ用ゆべからず 或ハ馬だらひ古盥の類うけ
陶器又ハ飲食の具杯ハ御遠慮有して禁じて草葉木根ともに毒気
ある物も有れハ毒草などもつて撰する植葉を口に入る事次

朽枝破葉抔用ゆるに場所ある事

○朽枝(くちゑ)破葉(やれは)蔓葉抔も花形の様振よけれハ時節に随ひ会席
獨樂等にハ不用る場あり但出家隠居杯に至つて正面床に飾に見ゆるハ
甚し何も花葉枝とも奇麗(きれい)なるがよけれバ

形状花葉文質ある事

○花葉(くわよう)の文質(ぶんしつ)とハ根葉ハ花ハ質にして人體の如く葉ハ文にして衣
服のごとし花葉各過不及ある時ハ花状に野(や)僻(さ)の失あり花葉
より繁き時ハ野なり葉。花より繁き時ハ僻なり形状も自然ならず出生の
體なる時ハ山林野州にして卑(いや)しく推撰奇巧に過ぐるハ僻にして

蕭條花なり是等の境を能く一顧有べし

手つまる物に待ふ枝葉の事

○萱の手原の活る。又ハ銚瓢のたぐひ 杯ハ 枝葉ニあしき清ニさけらハ
勿論さらし咲きても つるをさへきり手をつりぬき 或ハ少り遠く 杯とり
備てこゆる類ハ道部活むねらひにも活よりも後へと巻けまし
の図を互考すべし

祝儀向等の嫌悟ふ活の事

○祝儀向ハ勿論貴人才招請杯の席ハ先大凡ハ残茎後れ咲時節
たがひさる物も見とりこされ葉の類 又ハ名悪く色香並かへさる物或ハ

異花陰葉彼是打まぜみ葉拵枝葉と成小総て志ほれ之中く藤
易き物なれハ用ひ候ハゞ書祝儀の筆に作る傳多し

掛物に對する花形の事

○掛物に縣らふ花ハ絵の賞翫を主として花ハ是に准ふべし
総て画の書讃となる所ハ物偏繞く採様なかめ多き所ハ一際ひきく
画きく一ヶ形り花容を以て繋ひ備つる類ハ悉し　尤枝葉揃なきよお
白地に添るハ格定なり法外に得傳多し

書院坐鋪向と茶室の花に及不同の事

○書院坐敷の花ハ別に倉の儀なる故　深澤に嵩なると専要とは

器物も亦是に准じ茶室ハ唯幽棲雅趣を主としてまびくら
ぶるに花も是に應ずる物なし

花見ざる心得の事

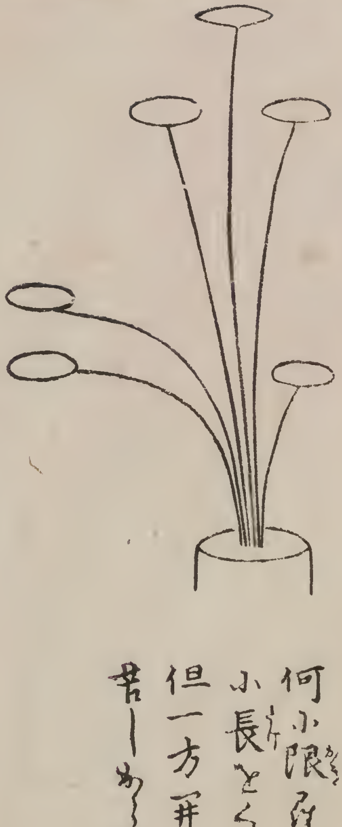
○衆に饒まる花ハ世上の噂界に拘らず腰の物扇木ハ我が若に座
き所に並べ花より二疊程隔蔘してみるべし又主ハ謙遜すべハ猶花の
下へよるべし深く惣集會席抔ハ世上の芸術に成て勤むまでべし
右十六箇條ハ傳書の内僅に十が一を抜出て其道の誌とす尚
清流の奥義を探り盡さんとならば都鄙遠近其所に隨て傳流
傳書の人にも傳あれバ夫にたよりて學ひ玉ふべし

## 十一ヶ条支嫌ひの図

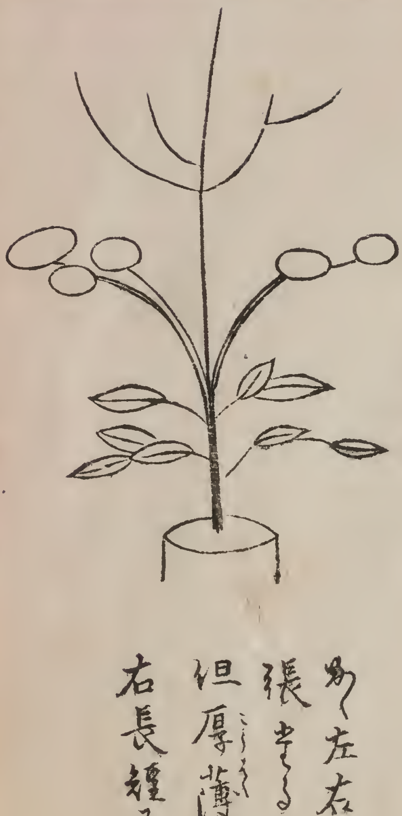
葉あるものとかく花ばかり生ハ悪し 但
花斗居てもとかくハ杜若かきつばた斗ハ
すゝきが萩の葉ばかりの如きものばかりにて
補ふハ苦しからず

わく水仙なとハ添葉のことにて面白形の
物もありけれど花ば節よりハ悪し 但常盤葉
或ハ花茎生ずる芽出しの若葉 又ハ花
終て後も葉の暁しなき物ともあり 是
等ハあらい枝ふ用ハ苦しからず

がく大輪を飾く生ハあしく 但前に
交葉ありて見へしはうげ枝ふ生べく
尺まるハ苦しからず



何小隈段次なく竪横共
小長をくゝぶるハ悪し
但一方并ひくすき間遠きハ
苦しからす次



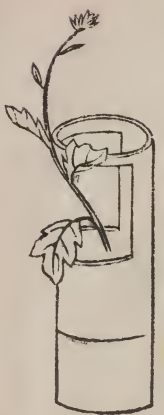
如く左右同所より出て引
張きるごとくミゆるハ悪し
但厚薄ありて前後左
右長短ある時ハ苦しからす次

かく見きり十文字に置ハ悪し但友枝の元にて聊さゝわり或ハ目立ぬ小枝小葉ハ苦しからす

かく鏡のごとく花葉枝とも平にさゆる事悪し但まゝく小葉小枝ハくるしからす

あく前隠くもく出るとおもぶし
冷すしくて嫌ふなり仏濃か
きへもじつてふ過い
若しまじず

新花葉水すりくふる成様之
しるへてふくへさわら旅い意し
他葉くそ宜貝いもし此露の
ふちまつれて出れい若しくす



おく月の梅すすか
ふちまきらる新い
あし

かく四寸以下偶子を入る事
四六八十本の外数なと但葉と
花葉相分してへまなる六
苦しからす
新花葉枝共まのつくる或ハ
ふせて巻い事但上葉と
下まて北出不遠ハ苦しからす

め新きハ物の元を進ミ
やうまるこくさるハ深し
松等木友竹ハ苦しからす

かくさんじくは行列鳫行
掛物のごとくみゆる也
但前後上下の津洗あれハ
苦しからず

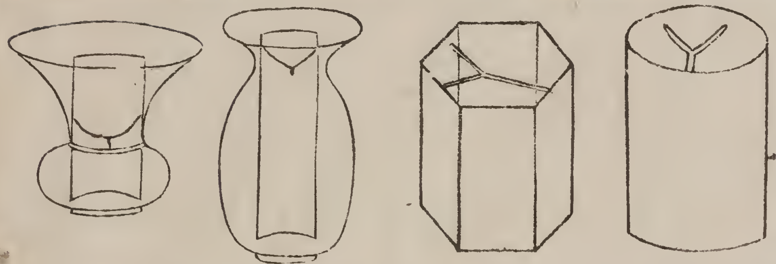
かく草にて木を畏こ又
木にて草をつかふ事ハ
要し　但一方通用物ハ
苦しからず

右ハ於形し

あし前より深く廻し活ゝり
あく口まい寿し 但つるの皮
ぐゝみまるハ含まるの茎の
細く也ゝら活物とるへ
きる所まて あらむハ
くるし あし次

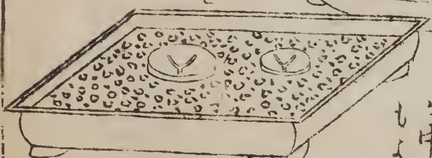
かく瓶の正面と覆ひ隠れハ悪し
但平瓶砂鉢杯の向のふちのかゝるハ
苦しからす次

右是迄ハ初楼十ヶ条の
太嫌ひの部らけ也



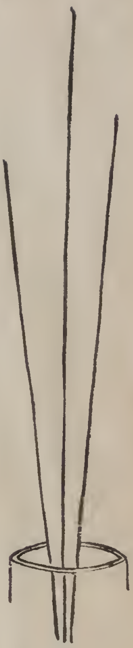
花配り様 柏葉様かくのごとく
木槿桃萩様其外何れも木
花形よ応たる枝と茎根
乃多少に准し相叶ふへし
琴様のごとく割り
或ハ十文字の枝を
用へし又茎数の
趣によりてかく
貼くつけてもよし

かく瓶中入り隈まてハ
花配りとよう致し
圓のごとく中へ薄板を渡し
くびれたる所にて花留とし
押へ重し留器に施て壽用し
何れも斯の器ハ茎留かさ
し直するによろしきを



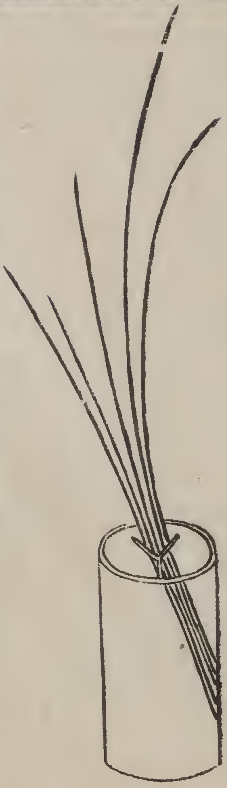
如斯会して挿くるゝ手軽に
仕に板を打つけて去角く
さるいハ一面に立かゝりなき石
ら中石をとらせおもしとする
もよし

下もかく鉢一ツにい
中まくんに薄板を入
其く仕を渡し上に
もおし出し小柄
利とおかしよふむも
よし仕方きくるる

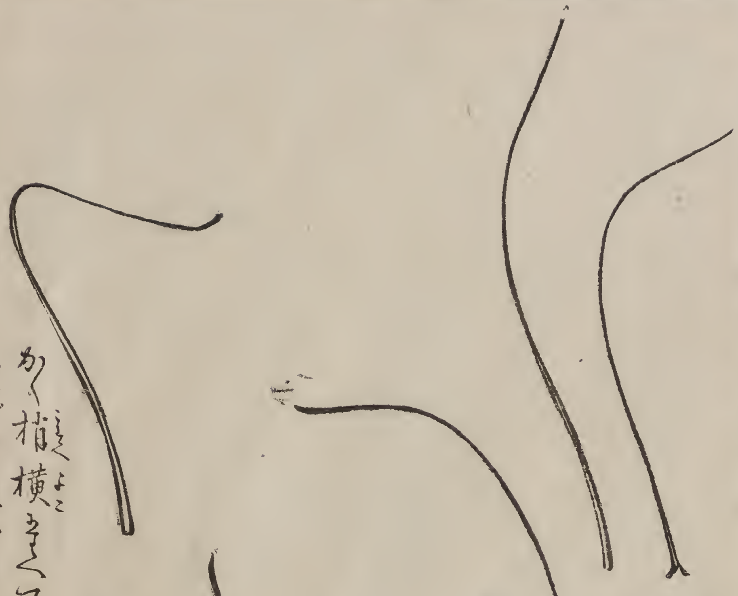


こゝに茎ハ直形なるよろしく
なりしきれるかく様り
ふ直なるハ又添くがし
何事も程あるべし

かく本まとまるにほんのうと
きこゆよぶれバ数活ひ
がるし勘弁あるべし



かくのごとく向陽へ
様ふてつく様子
大小曲直水中の左
めしくべくあるなり



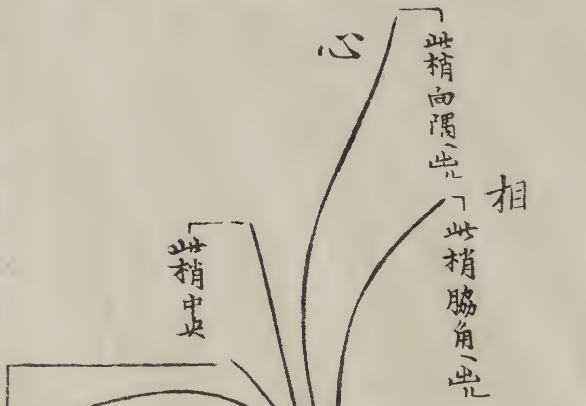
斯心ハ假名のくの字のごとく様なし但強く打つらく居り悪くハ此圖根を割へし

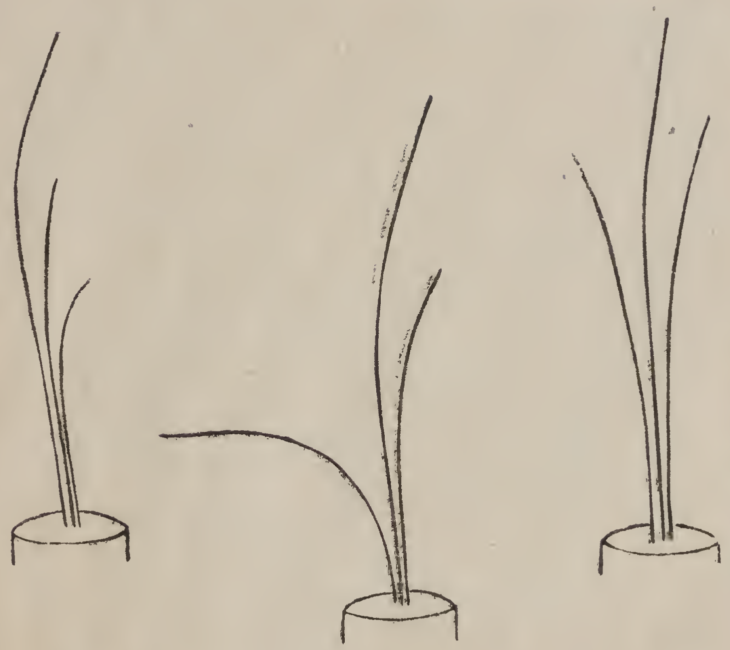
かく戴ハへの字にしく様ひきよし

是又ハ極らしと見えれど太さ中へよるもの也

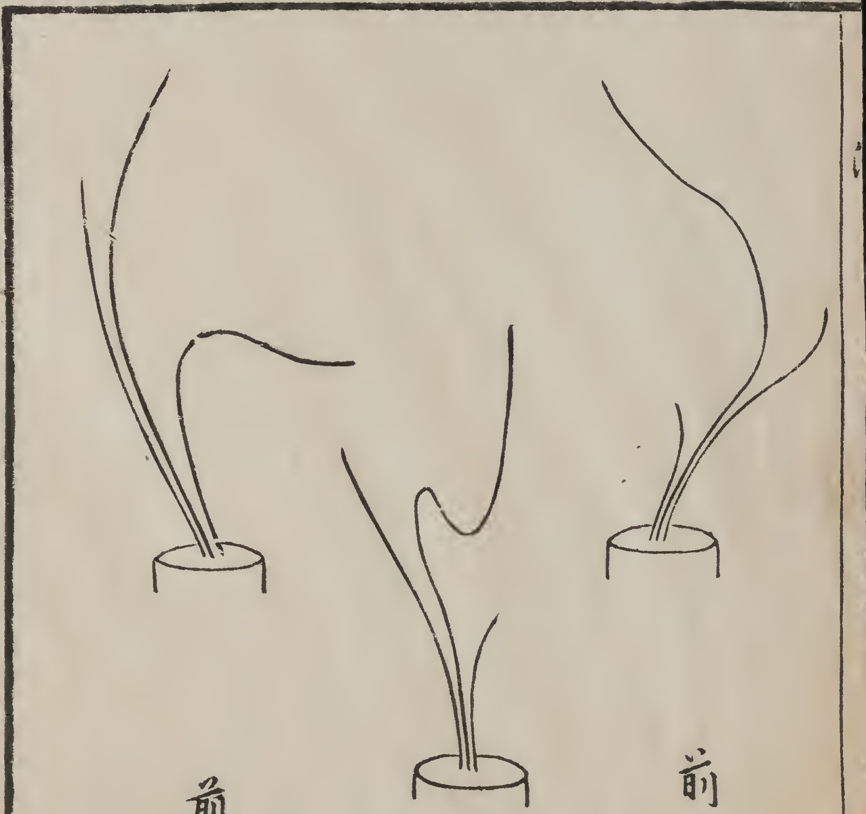
かく指撞横なくて何ほど打つくとも如圖根茎延びて直ふ寺ちむ時ハよく居るとなり

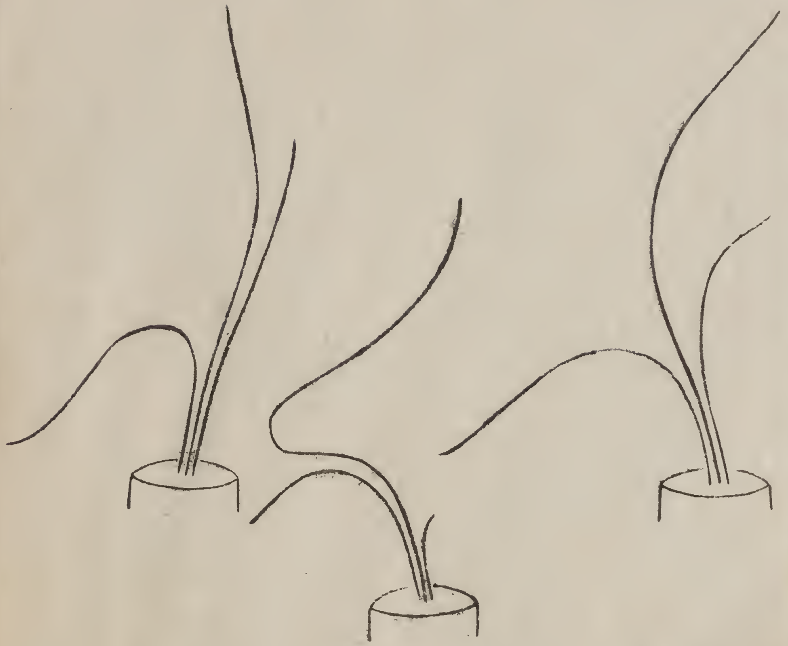
圖る所の七枝ハ花葉枝の多少長短ニ随ひ諸曲屈伸ニ應し
三枝ニ配り五枝ニわかち或ハ七所ニ備ふ尚出生の模様ニ
除て魚帯増減ニて得傳あり





草木各出生の大小体容に随ひ上六七枝内の何れの三枝に然とも相近き所に配ひ高下左右従横表裏自然に何も変化時宜を乗じて見計ふべきなり深く心得べき此意をもて取扱べきることなり


前不同
前不同
前不同



前ニ同

前ニ同

前ニ同

草木何に限らず根茎
如斯右往左往にゆる
める時ハ水中あしく
水際漆げはして花
形居りの次尚次とえて

如此腰水中ともよく
揃ふ様に揉て入るへし
水際をきしりとしてたるも入へし

如形大小よく揉ぬといへども曲り
根逆なる本水中と当りかぬる也
則左の通り揉べし

かく揉ためてきれざるふくさ
ものいらぬやうにし切本の如く
水ニ入る所を錐にて揉めと
入ましせんとするべし
水上よさくへくされい
よし

右五種の花據く揉方ハ梅椿菊牡丹水仙の五品是ハ世に多く
花も盛り久しく四時に随ひて作りて活る花の最上なれハ又方々に
より挿しさま〳〵あれど當流ハ此五種の替古を専らにして余ハ皆執行の
力を以推て之ある揉方左の如し

春枝

おくもどのかく揉へし

○ハ揉む處の志るし

△ハ剪り除くる志るし

斯のごとく揉心ろへし

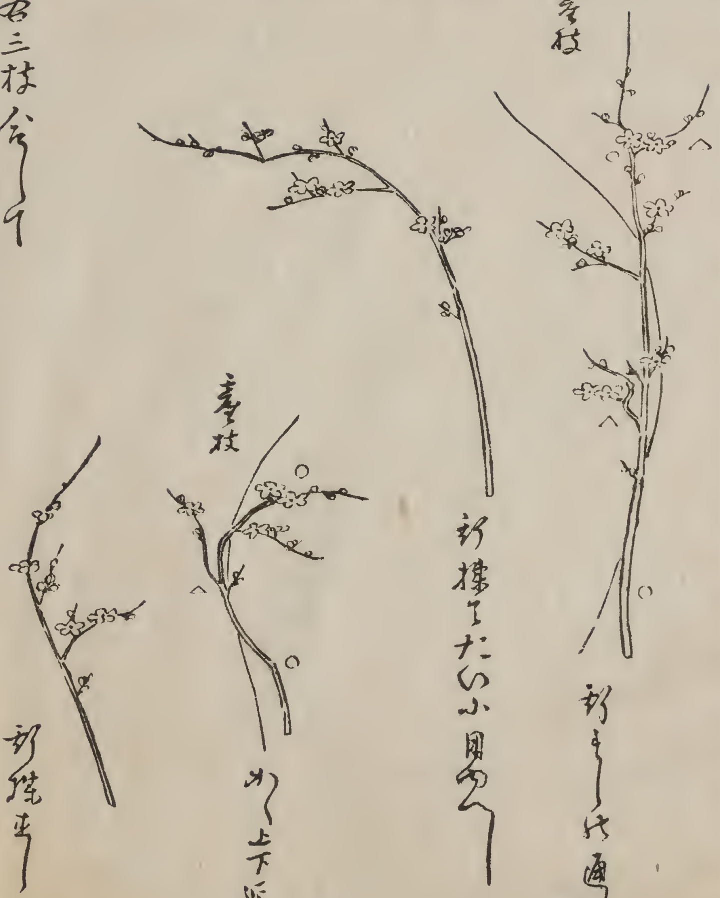
壹枝

折もし流通し挿へし

折挿てたひ小目のへし

壹枝

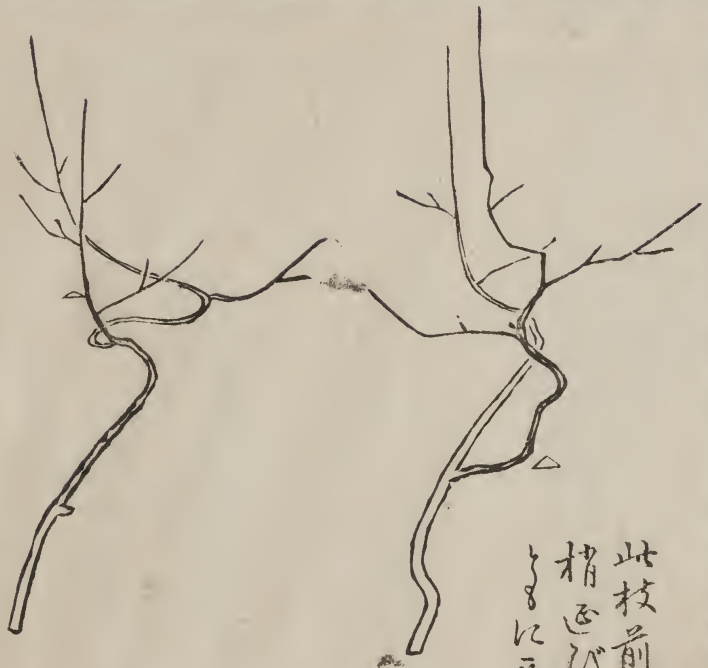
折て上下延へ挿へし



折残ましく相ゟへし

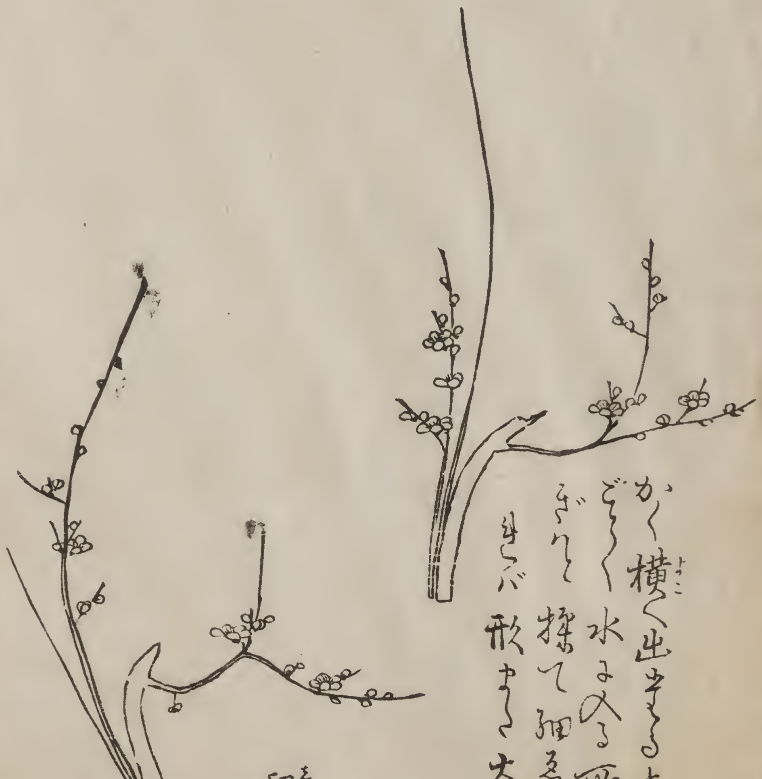
右三枝合して活ゟ出す

右三枝とも花壇如斯さし入るなり其外自然其
葉数に随ひ変化なすべし此趣梅のみにあらず諸木におよ
ぶる物をのく図となり



此枝前の方曲まつて面白けれど
梢延びてすこし撓りれバ添へ挿り
とまに悪し前を除て向を用

此枝後の方頻りに屈
曲なれども腰伸て直
形る故前の枝を除き
さるべし外何にても
此意をもて推すべし



かく横(よこ)へ出たる太枝を左の
ごとく水まへる所ゟ小枝の出
ぎはにて撓て細ゑだを替(かゆ)
然らバ形よく大小変(かへ)るなり

印(しるし)の所を撓之

如此の株より出しかへて
置なかれハ左のごとく
変るなり

即ハ株より
所之余ハ是に
准へし

椿ハよく風情たゞよふに葉並の
薄くミゆるハ悪し還げん身をあらば
繞く椿ハミ木ふとく小枝ふ屈し
すぐる形おもむき添し何れも椿ふ
相応せるゝよふ立てハ
各同意なり
次乃撰方の處ふ
くハし別枝は
巻ふ委し

如此所ハ葉繁く縮で
多くハ撓く屈べし勿論
よき枝屈曲ふして
水際撓ひがたき
物なれバ多く初心
者ハ三本くらひを限
とさだむべし五本ハ
得てより入べし

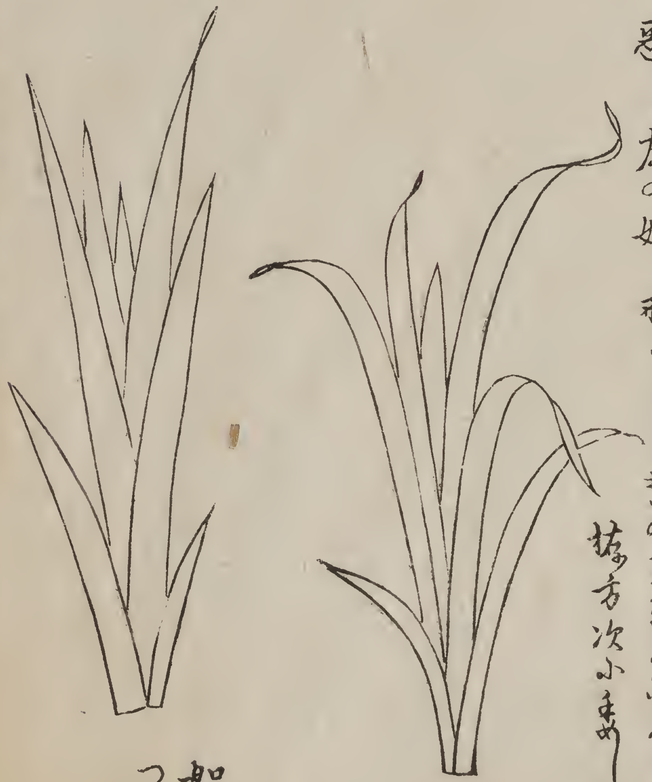
如斯椿ハ多分三枝の
内二枝ハ座まて兼帯(けんたい)
させく甚外ハ小枝と
あしらひ小添る事
よし　別体奥乃
巻ふ多し

如此枝ありて花葉の繁きは
まづ悪く取捨ありて花を一二
輪ハ強く葉を五六枝も残
し左の通あんばいに入れバよし
茶をおしミ葉をも厭
時ハ風情悪し一根も
印乃所より
剪べし

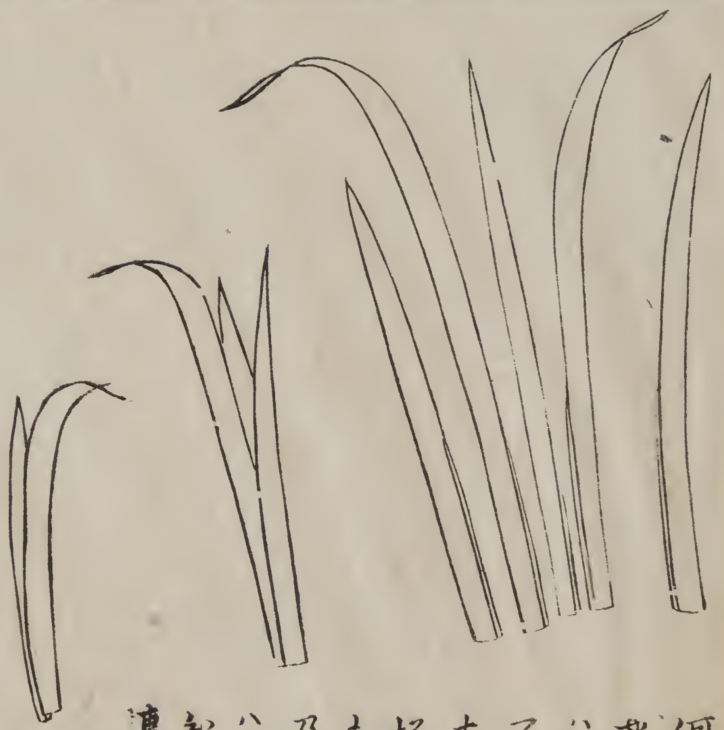
如此ハ懸瓶舟ニ
釣様専らし又
置瓶乃よ世様なる

如此ハ二瓶
大小内外の
添方之
餝ハ是ニ准
屋し

杜若の風情ハ多く葉ふあるなり圖のごとく乃葉ハ繪形ふてハ
曲ありて面白げなれども花ふ取合時ハ葉先むつきみだれて
悪し左の如く形るところの葉の直なるふ志くべし次尚葉の
挿方次ふ委しく見るべし

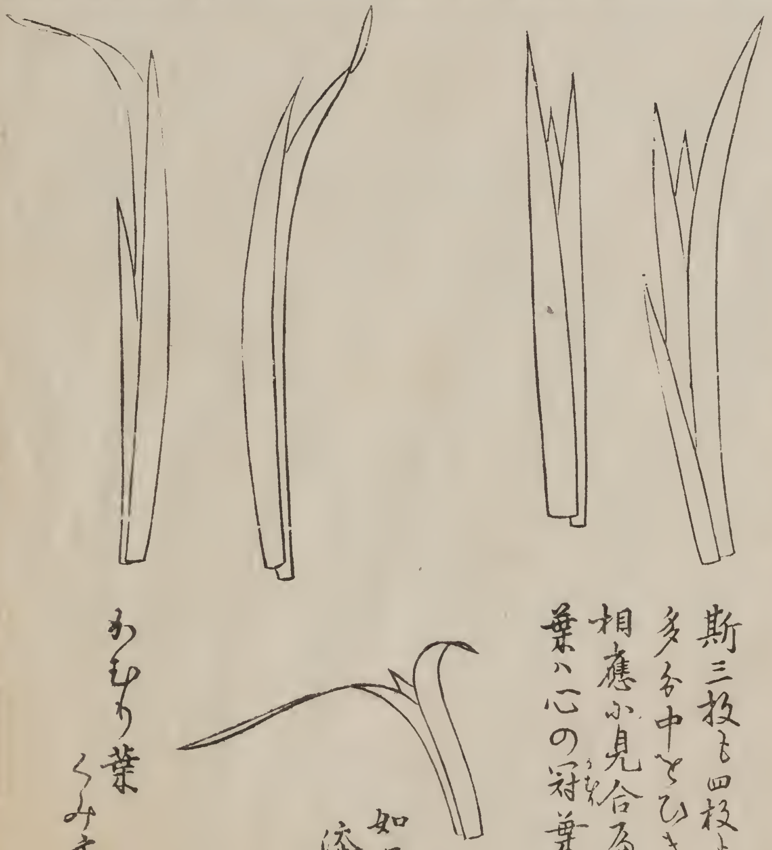


如是元より真直(まっすぐ)ふつき立出る葉宜し



何れ産の侍ふてハ遣(つかひ)
かたく志体りなきハ葉
ハ多くなし左ふ圖の如
く一枚宛もぎ放ちゆるく
左於通長短恰好(かつかう)能
様ニ二枚まても三枚ふて
もくみあはせどもせて元(もと)
乃ごとく組合置し最初(さいしよ)
ハ稽しがたけれど深く
心易出来るものなり
連て多し

## かむり葉くみ方



斯三枚も四枚も組(くむ)なり
多分中をひきく手場所
相應に見合為ᆨ左乃長き
葉ハ心の冠(うむ)葉也組なり

如是の葉ハ懸(くわい)瓶
添瓶によし

花も曲有るハ面白き様なれ共
斯本末ともに忌しく移り
てハ必水中水上ともに蹤儀
なり惣て杜若の茎ハ愚に
通りにハまとめられざる
物なり譬本直ぐにても
左の如く末のいつまほどに
曲あらくハ葉に添ざる之

めくまずて順よく曲
りたるハ葉添ひ
揚しまさねとしたき
容も出来るもの之
尚遣方奥にくらし
何れ杜若の茎は
直なるにさへハ能し

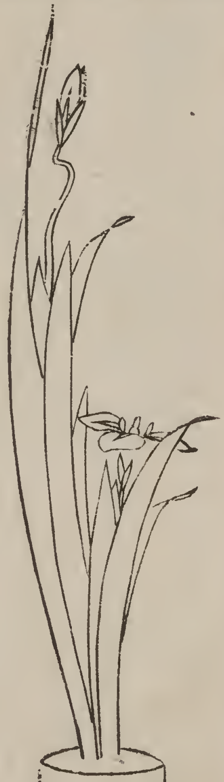
右の但葉ふ直なる茎を交へて如是ふ遣へし

二本の挿様変化數多あり活巻と見るへし

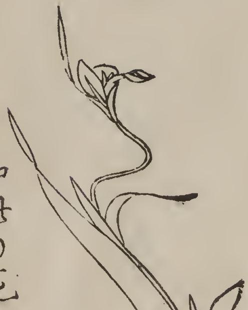
三本遣前ふ同し

三本遣左勝(ひこうくつ)
手別体浮巻ニ
多し

曲花遣方
別体浮巻小
數瓶あり



右に同し
別体奥に
す



如此の花とも懸瓶添へ物水際
麁き杯に用ひてよろしかるへし深巻を見るへし

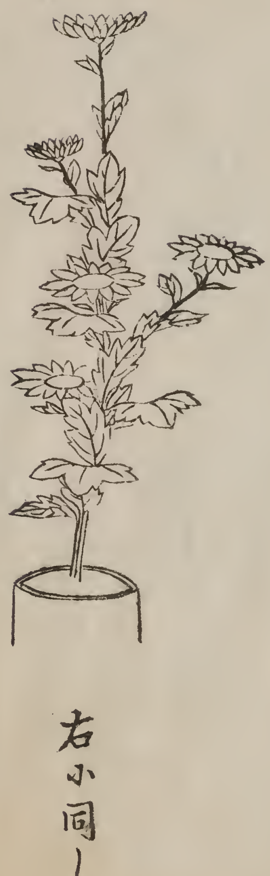
大菊ハ作り方乃功者不功者ニより殊外曲直みゆるなり
唯活茎ニハ直なるを専要とするなり圖の如く様くに
くねり曲り或ハ二輪三りんつゞきの枝乃まゝのかくもいきまするハ
いとしほらしく次

但中菊小菊とも御好ミのごとく
乃傳あるさ間しく乱れ
麁きをきるを峯山ニ掛
篭採ニとしなびけ入
又しハまゝ面白き
風情あるなり
浮巻とぞ

如此の元ハ直なれども
枝茎開きて外の枝
そらしき

斯花長短よ枝乃
まくうもなし、はなり茎に
出る所ハ何様つきて
も各用たるなり
活花に志ある人菊
をつくらバ聊その意
体用ひてとゝのひ
きさくも能なり

かく茎の曲りあるハ
各図乃ごとくあるべし
直して用ゆへし最初
ものうちハあらむれバ
それ捨まじハ茎葉を
枯らしさも其之志られ衣
まんじ〳〵なるれバ折ざる
ものゝ尤節を除けて
捨る人多く揉ほぐし
但是を揉るに五練一
致の口伝あるべし必
折る ことなし



右のことくさかへる
枝まて三つ五つ
七輪まていつも時宜に随
て入るへし委細猶く
奥の巻にあり

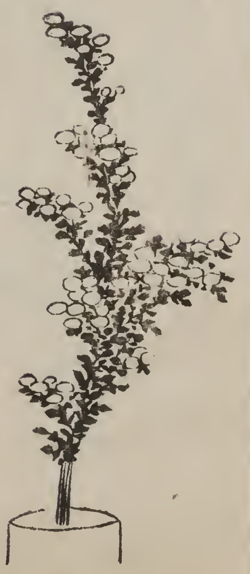
右に同し

右一揃つゝまゝと二揃つゝと
交へたる如是差し尚別体
後巻に多しこれハ唯大通の
一方といふ

作てたる中菊杯
かく澤山に入まじく
花瓶累（かさな）り押合てよ
ろし

かく画瓶杯子十分（ぶ）なひけて
入まじるもようく杯ましく添し尚
籬（かき）杯のこぼれ咲（さき）ぬハ別てゆうし
小菊杯も同意なり

夏小菊
崖のてい
秋冬小菊
臺の体



夏の小菊れ大凡

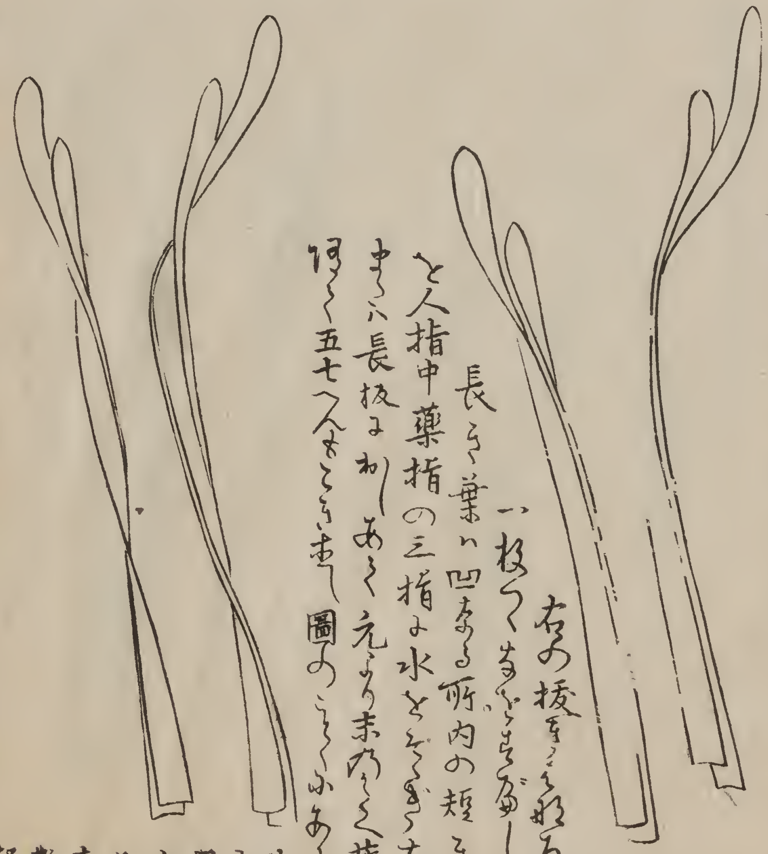
秋冬の小菊乃大凡

水仙あふくられ麁にて直なるハすなほなるものなり
中にも出生よく葉の腰弱く又ハよれるゝてなとり
うるはしき葉あり冣掛瓶なとにあふる葉をとりて強く
二もとくらい入てみて格別に瓶よ
丈高く數と
入るにハ悪し
次の圖ハごく
直なるを撰ニ
用ゆへし大ニ
美悪のある
事也

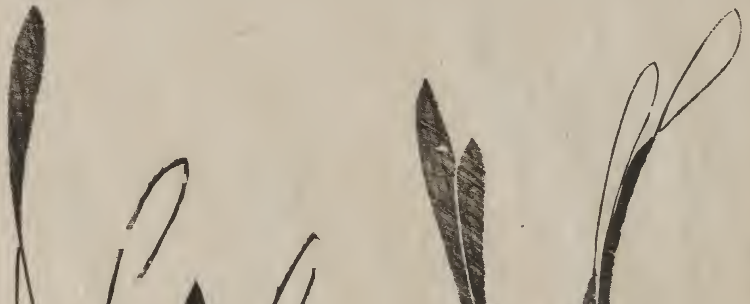
如是葉強くまぐひらめ逢なるを
最上と次考へ合べし茶ハちゞみて
のびざるをよしと次

弱くふくれあがりしを次とする
葉性つよくされ唯ひらめ逢によ
株なを となる形

水僊葉搆一ハ本の一茎を取あげ白根の所を静かにま
ミ又ハ捻りても茎根をゆるめぬけ先ッ花をさしこみて
丈より葉をさぐんしよくづし最佳二枚づゝかさね取りあく
ゆく多分ハ丈を始終あまり於て用ゆべしそう満ハ花留代用
がく紀器又ハ曲ある袴を遣せさ節に
こちゆる事破まさる様よの事
とく曲し売さ満
ぐうけのいざる
節ハ三節拵よ白
根をすかにうり
捻く曲し

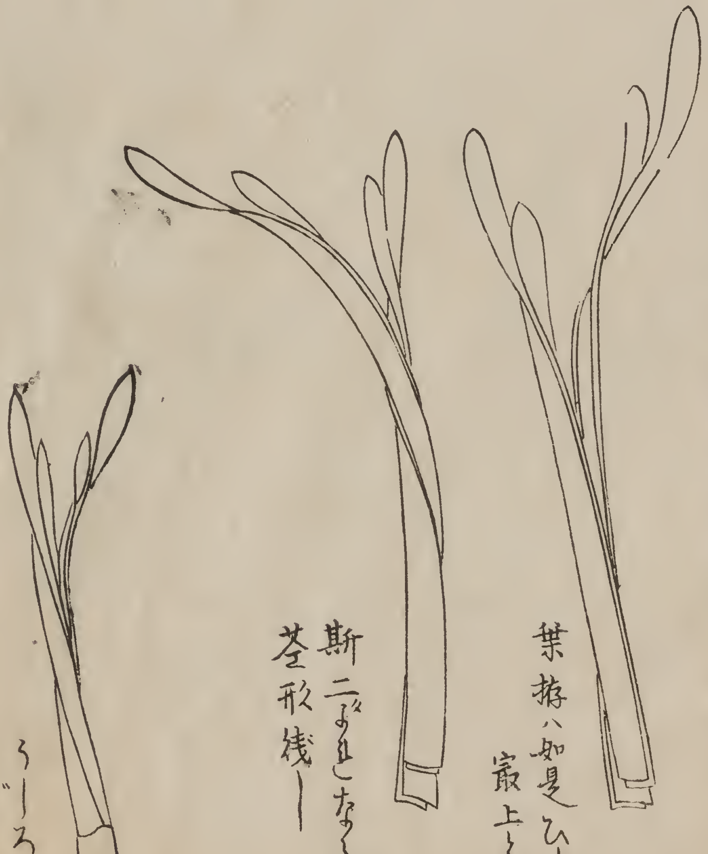


右の掻ずゝをわける葉も
一枚つゝなぶらかし但そこの
長き葉ハ凹なる所内の短きかたハ凸の所
と人指中薬指の三指に水をそゞきつゝなぶ茎ゑう
まるハ長抜にかしあらく元より末のかく葉に剛柔に
付て五七へ入またころまし圖のごとくふあらせまゝ茎
茎もこゝろひしぐ
く葉にちからをせ
聞ゆべし但葉
余り緩くこゝに
過ることハ葉
青色ぬけて綫
艶落ざる様又茎の
起し様口傳多し



ふゆのうけやり圖のごとく
えをおしまいで
二枚合せし長き
方乃葉をもつて
短じかきを後の花
にあしらてさしこむ
べし

まへあしらひの
長き葉より
一枚づゝさしこむ
なるし何れも
格ハこれ同様也



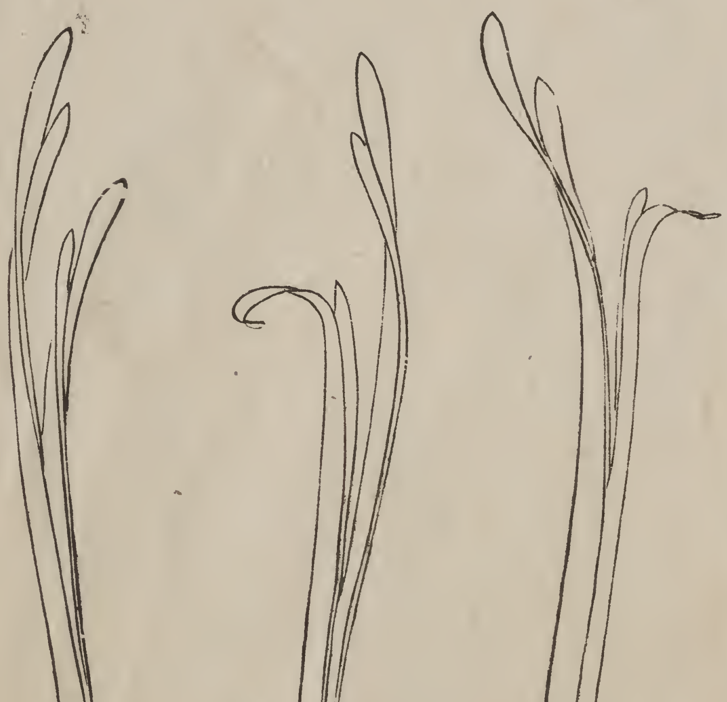
葉捌ハ如是ひらかれど
最上とするなり

斯二よしなるハ下なり
茎形浅し

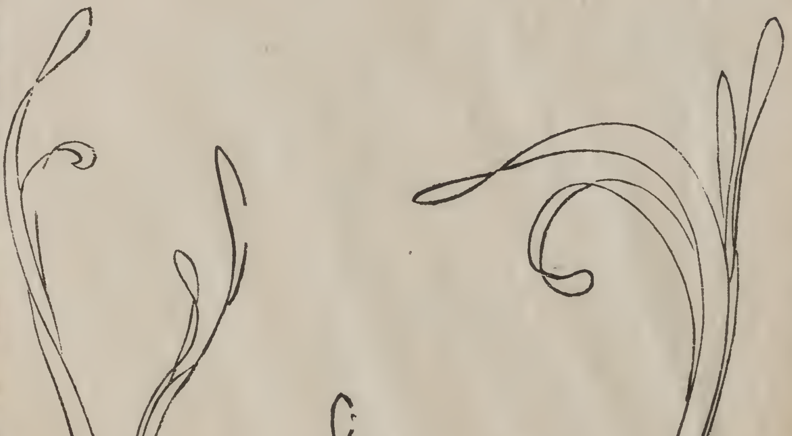
うしろ様子おくハ
かげゆくめしよつて
しめてもよし
後ととのへし

茎葉すなほかくあざやかに
まじ乃通ふつくしふる
こゝろし

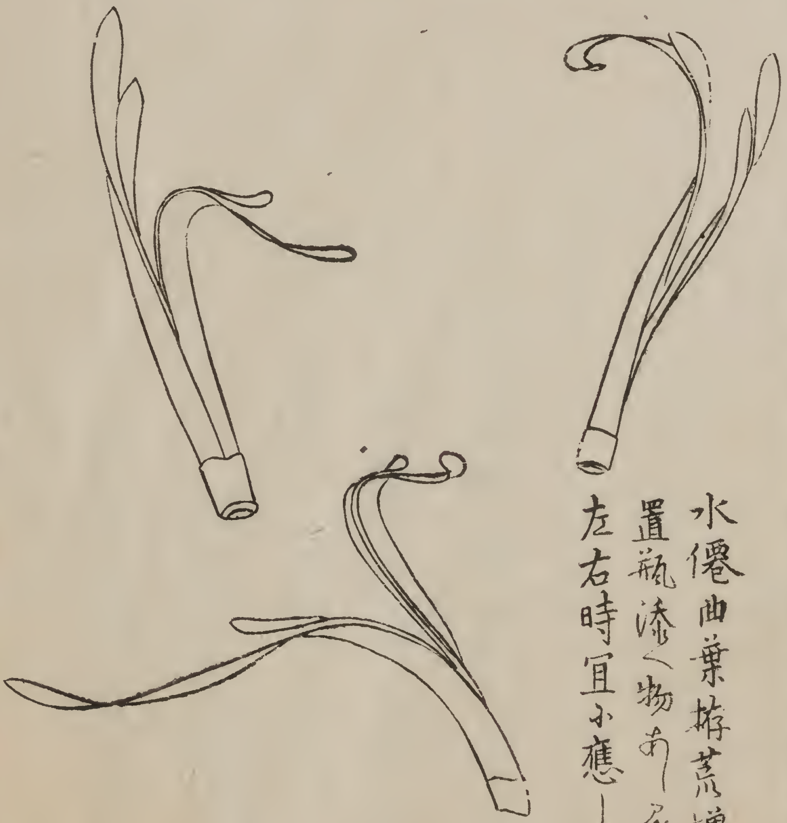
水仙ハよくしほる物ゆゑあけまづる
かく縄の様子よれるハ年瓶
と遠ぐく見合へし



水仙必葉にくせありて一様にあらざる物也故に右ある葉組ともやく左りより出疑し左りとも右へよるべきあり因て左り勝ツ手の心にて葉組を二三葉宛て出して下に用ゆる葉も此意にて捌く有べし先花形は図の如し尚次に見るべし別体後巻に委し



如是ハ繪にてハ曲みなりて
折りし絡げたなれども実茎
までハ甚いみじ用ゆへし次
尚左の事し挿へ
うつくしう
ならし



水僊曲葉擣蒸増如是懸瓶
置瓶添〻物あり座いす前後
左右時宜に應し見斗ひ用ゆ

盡信書不如無書と孟子の言辭宜なるかな古今本草の
學行れてより一葉一花其名審かならざるハ稀し然といへ
ども變化の道止時されハ其説も又止處各理を解證と
述つらく其名も亦一定さゝる物あり何まもり是何か此らく
書ふよつく惑つるのミ故ふ其當説を取く夫とて是トいひ
是とももそ是しと云ふ同名異物一種両名の俗ふ倭漢異品方言
乃中を僅ふ聞ふまゝ嗅ひ得まゝる二三名を揚け後乃卷に花
類の邊ふ誌しく聊此集を叙ふ人の便ふ備ふ見る人不足を
補ひ違つるを改めまいく　予か幸ひ能く者乎